

明治初期東京大学医学部卒業生動静一覽（一）

小 関 恒 雄

明治十二年（一八七九）、東京大学医学部医学科（以下医学部）は第一回のいわゆる「医学士」を世に送ったが、以降京都帝国大学が明治三十六年最初の卒業生を出すまで、医学士を独占し、医界の中樞を担っていったのである。これら明治初期の医学部卒業生の出自と卒後動静を年度毎に比較一覽してみたい。

今回は第一回生以前の明治九年卒（正確には「東京医学校」卒業）と、一回生、二回生を扱った。卒業年（度）は鉄門倶楽部発行の「卒業生氏名録」（ここでは一九三八年版）に従った。年次を区切る時点につき、後出引用文等と一部異なることに留意されたい。なお明治五年までは旧曆に従った。引用文等の「」内は著者注ないし加筆である。

一 明治九年卒業

医学部の前身「東京医学校」の唯一回の卒業生である。詳細は他に譲るが、幕府以来の「医学所」が維新混乱期に種々の変革を経て、明治四年（一八七二）いわゆるドイツ医学の導入を見、「東校」と改称し、予科本科と分けた。この際「改めて本科に編入せられたる者」^(一)で五年の課程を終えた者二十五名が卒業した。制度の変り目で雑多な生徒が混籍して

		1840	1845	1850	1855	1860	1865	1870	1875	1880	1885	1890	1895	1900	1905	1910	1915	1920	1925	1930	1935	1940		
渡辺悌二郎	石川平民	嘉永4.8.18										陸軍軍医 ● 松山	侍医 ●	退職 ●	没東京 大13.4.2									
長谷川順次郎	新潟平民	嘉永5.9.9										陸軍軍医 ● 栃木	開業(東京)					没水戸 昭4.4.10						
三浦浩一	滋賀土族	嘉永3.11.28										静岡 ● 徳島 ※	開業(徳島)					没徳島 昭9.6.9						
小野敦善	弘化3.5.24 山口平民											陸軍軍医 ●	陸軍省 ●	軍医監 ●	退職 ●	没広島 明34.4.30								
桜井郁次郎	群馬平民	嘉永5.9.6										内科 ● 助教 ●	産科 ● 助教 ●	開業(東京)					没東京 大4.2.10					
中村良益	秋田土族	?										弘前 ●	秋田 ●	開業(東京)					没東京 明40.1.21					
印東玄得	和歌山土族	嘉永3.										外科 ● 助教 ●	薬物学 ● 助教 ●	没東京 明28.11.25										
大川宗炳	千葉平民	?										静岡 ●	没静岡 明35.1.27											
浅川岩瀬	福岡土族	?										千葉 ●	石巻開業 ×											
小林玄海	福岡土族	?										警視病院 ● 助教 ●	東京 ● 助教 ●	没東京 明16.7.24										
橘良詮	嘉永2.三重土族											生理助大 ● 助教 ●	鹿児島 ● 助教 ●	明16.8.22										
柳下貞橘	千葉土族	?										和歌山 ● 助教 ●	高知 ● 助教 ●	明15.										
大河内和	愛知土族	嘉永3.2.1 (異説あり)										福岡 ●	明16.1.13											
赤鹿東策	兵庫土族	?										熊本 ●	◎	×										

〔注〕府県・都市名は各府県病院(医学校)を示す。殆どは院長・校長(格)。※所謂県立医学校廃止(岡山, 千葉, 石川, 大阪等は医学校存続)。

◆任教授 ◎医学博士 ◇名誉教授 ●発令異動等起年 ○当時現役(役職) ○当時生存 ×既に死去 斜線は留学, 短期のものは新藤二郎を除き視察派遣学会出席等。生年で月日不明の場合, 旧暦を西暦に直すと旧暦(11月~)12月は次の西暦年となる。例えば明治9年卒印東玄得(嘉永3年生れ)はもし旧暦11月29日以降の生れなら西暦1851年生れとなる。こういう場合, 年の大部分を占める1850年にあてはめた。生年月日記載なきものは享年等からの逆算。

図1 明治9年(1876)卒業生

いた時代であり、多数の退学中退者を出している。^(三、四)卒業後、明治十五年（一八八二）に「准医学士」に認定され、明治二十年になって「准医学士」にして卒業以来引続き医学関係の事業に従事せる者^(二)二十五名に漸く「医学士」の学位が与えられた。^(一)すでにその時点で死亡していた（と思われる）浅川岩瀬ら六名は、当然「准医学士」に留った（図1）。

いわゆる明治九年卒は二十五名と上述したが、^(二)図1のごとく三十一名である。この間の事情は次のようだという。すなわち「東京医学校では、明治九年十一月に本科卒業生七名を出したほか、二四名が卒業前に採用せられ、各県病院長、医学校助教など卒業生と同等の処遇を受けていた」と。^(三)なお、「本〔医学〕部ニ於テ明治九年十一月ニ本科ヲ卒業シタルトモ同時卒業試問卒業証並ニ学位等ノ定規ナキ時ナル故ニ授業ヲ了リ直ニ退学シタル者三十一名内五名ハ本部助教ニ任セラレ六名ハ陸軍々医ニ任セラレ二名ハ警視局ニ奉仕シ十八名ハ府県ニ聘セラレ病院長又ハ教頭ノ任ヲ囑セラル」ともある。^(三)つまり卒業式など式典は行われなかった。前述七名と二十四名の各々詳細は不明である。ともかく、明治三〇四年頃入学した彼ら（「多く蘭医の子弟であり最初に於て英医学を教授され後独逸医学によつて完成せられた」）卒業生は世間の「非常な歓迎を受け、特殊の尊敬を持つて遇された」。^(五)せいぜい「二十代の青年が百二十円処の月俸をもつて病院長」に迎えられる。彼らの「初任」一覧が掲げているが、^(五)図1は必ずしもそれに従ってはいない。

* なお、明治九年九月卒業ともある。^(二)

一 明治十二年卒業

このクラス（図2）は明治四年頃「東校」入学組である。^(六)予科二〇三年、本科五年制で、明治十一年十一月（一八七八）に全学科を終えている。医学部第一回学位授与式は翌十二年十月十八日、文部卿寺島宗則ら臨席の下に行われた。授与された者は明治十年十一月卒業「製薬士」下山順一郎ら九名、同十一年十一月卒業「医学士」清水郁太郎ら十八名、同

年十一月卒業「製菓士」桜井小平太ら十名、計三十七名である。式次第（「東京大学医学部学位授与式手続」）はすでに紹介したので繰返さない。^(六)『ベルツの日記』（明治十二年十月十八日の項）に述べられているのはよく引用されているところである。ここでは、当日の様様を伝える雑誌記事を一部紹介しておくに留める（東京医事新誌八三号一八七九）。

去る十八日東京大学医学部に於て学位授与式を行はる其景況は当日午後三時に本部総理教員参集同三時四十分文部卿輔其他邀招の諸君参集同四時一同式場に臨まれ総理心得石黒忠憲君今回学位授与の旨趣を述べられたり其演説は

忠憲本部総理心得ノ職ヲ辱シ幸ニ本日此学位授与ノ盛典ニ会シ為ニ一言セサルヲ得ス謹テ本邦医学学制ノ典故ヲ述ヘ次ニ本日学位ヲ受ル諸氏ノ為ニ一言ヲ述ント欲ス

〔略〕

今上御極明治維新以来医学ノ驟々トシテ進歩シ試科ノ法称号ノ則皆具リ本月初メテ医学製菓学ノ学位ヲ授受スルニ至レリ誠ニ我医学歴史ニ特書スベキ盛事ニシテ明治十二年十月十八日ハ医学者流ノ久ク祝スベキ吉辰ナリ忠憲今此光榮ヲ受ラル、諸学士ニ向テ一言ヲ述ブベキ者アリ抑諸君十年ノ苦学ヲ積ミ数十回ノ試科ヲ経テ今日此榮譽ヲ得ルニ至ル若シ数年前入学ノ最初ヲ回顧スレバ同学ノ士数十名然ルニ或ハ疾病ニ侵サレ或ハ事故ニ累サレ中途ニ廃学スルモノ実ニ多シ現ニ明治四年入学ノ者六十六名中今回医学士試問ヲ受ルニ至リシモノ僅ニ二十二名トナリタルヲ以テ其一斑ヲ知ル可シ然ラハ則チ此是ノ諸君ハ所謂人之所不知、而我独知之、人所不及、而我独能之者ニシテ誠ニ造化ノ寵ヲ荷フコト大ナリ造化ノ寵ヲ荷フコト如此大ナル時ハ必ス一身ノ為ニノミ計ルコトナク必ス天下ノ為ニ計ル所アランコトヲ希望ス

右終りて総理池田謙齋君は卒業生徒に学位証書を授与し且祝詞を演べらる医学卒業生惣代製菓卒業生総代交る／＼謝詞を述べし後外国教授ドクトル、シュルツ君同ドクトル、ランガルト君の演説あり續て林洞海先生の祝詞（石黒君代演

す) 学士会院会員福沢諭吉君の演説あり最後に文部卿寺島宗則君自ら祝詞を述べられ是にて全く式を終わり夫より別席にて夜会を催はし臨会の諸氏一同を饗応せられ各々歎を尽して退散せられたり本日臨会の諸君は文部卿輔、故文部卿、文部書記官、学士会院学士、内務衛生局長次官、旧校長、旧博士、新聞社長等なり〔略〕

今回卒業生徒にして学士の称号を受し者の内三名は専門修業の爲め独逸国留学を命ぜられ其他は本部外国教授の介補を命ぜられ又各府県の病院長司藥長等に聘せられて一人も残るものなし又佐々木政吉氏は試験成績優等にして外国留学を命ぜらるべき筈なれども其父東洋氏の志願に依て自費を以て近日独逸国へ留学するに決せり又医学卒業生の内、神内由巳、半井英輔、川上清哉、外山林助の四名は試験の時日後未だ全く試験了らざる故に学位授与は来春に廻さるゝ由〔略〕

なお、東京大学には該式典の事務的記録が残っているといふ^(三)。列席者等が詳しく記されているが、ここではこれ以上触れない。

図2も鈴木^(四)の示す「初任」一覧を手直した。

三 明治十三年卒業

明治十二年十月卒業の二名(神内由巳、半井英輔)および翌年七月卒業の浜田玄達^(五)ら十七名に対し、七月十二日第二回学位授与式が行われた。その模様は次の通りである(東京医事新誌一二二号一八八〇)。

去十二日大学医学部にて学位授与式を行はれたるは既に前号に報道せし如く此授与式は第二回にして去年十月卒業の者

二名本年七月卒業の者十七名なり当日右の手續きは午後第三時本部綜理教員参集せられ同三時四十分に文部卿輔其他邀招の諸君参集せらる同時五十分に至り本部卒業生並に其親族及び本部本科生式場に入て席に就き同四時文部卿輔本部綜理其他の諸君亦式場に入る於是綜理心得石黒忠慮君は今回学位授与の概略を演説せられ次て綜理池田謙齋君は卒業生に学位証書を授与され次て祝辞を演らる医学卒業生総代邦語及び独逸語にて謝辞を述へ了て教授ドクトル、ベルツ君学士会院会員西周君各演述ありて後文部少輔九鬼隆一君祝辞を演られ式全く畢り会場の諸君に立食を供せられたり〔略〕

件の池田謙齋の祝辞を次に一部紹介する。(三)

「本部卒業生徒試問規則ニ拠り本年二月ヨリ例年ノ通り医学卒業試問ヲ開キタリ」而シテ今期此試問ニ応ス可キ生徒ハ都合二十七名ニシテ二月十日ヨリ此試問ヲ始メ試問委員諸君ハ勿論受験諸氏モ頗ル勉励シテ此卒業試問ニ従事シタリト雖トモ諸君熟知シ玉フ如ク本部卒業試問タル頗ル厳密ナルヲ以テ日ヲ要スルコト殊ニ多ク為ニ遷延シテ本月五日ニ至リ僅ニ二十七名ノ試問ヲ了リ猶十名ハ全試問ヲ了ルニ至ラズ此十名ノ試問ヲ結了スルニハ猶數ヶ月ヲ要スルナリ然レトモ方今世ニ医学士ノ需用多ナルカ為ニ既ニ卒業ノ期ニ臨ミタル生徒諸氏ニハ或ハ府県ニ聘セラル、ノ予約アリ或ハ郷國ノ学校ニ招カル、ノ急アリテ尚數月間学校ニ在テ他氏ノ卒業ヲ俟ニ違アラザルモノ多シ故ニ其事情ヲ文部卿ニ稟申シ夏休業ノ初ニ於テ本日ヲトシ前文部卿並ニ朝野ノ碩学紳貴ヲ邀迎シ此学位授与ノ式ヲ挙行スルモノナリ」云々。

図3に彼ら十三年卒を一覧したが、同じく必ずしも鈴木に全て従っていない。(五)

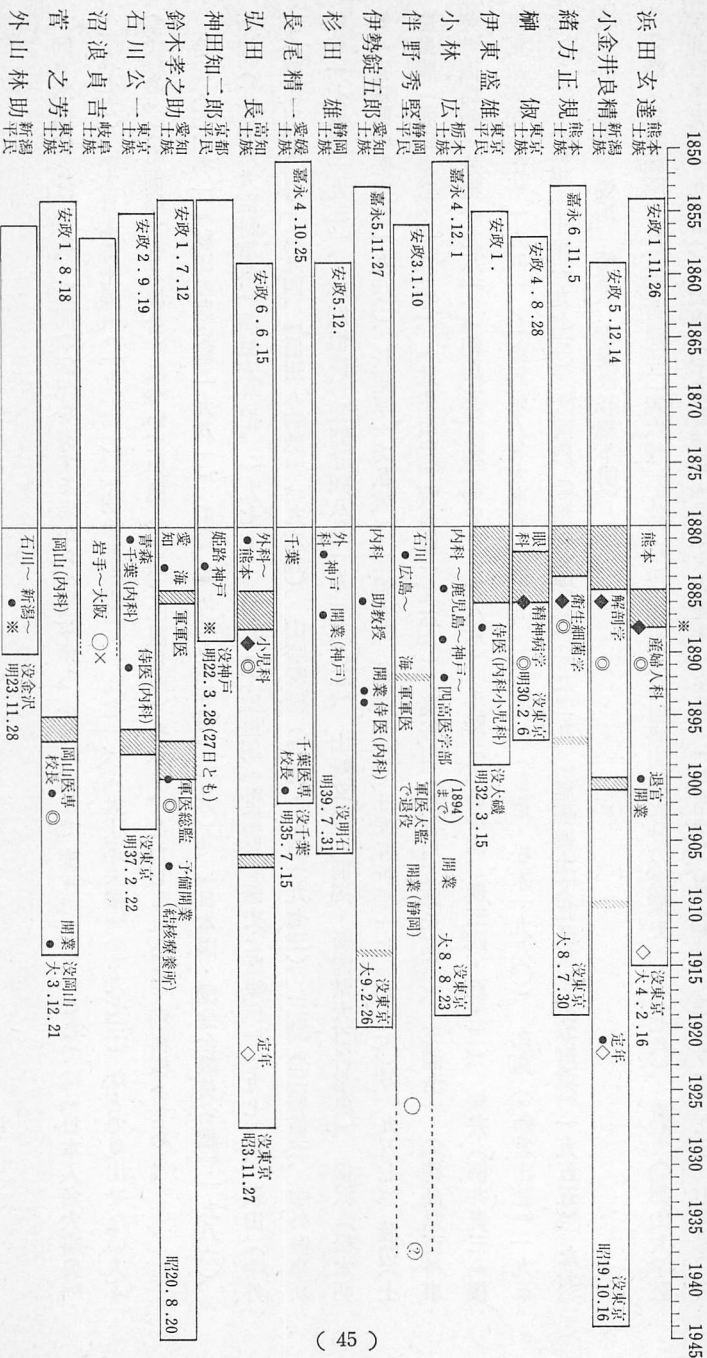


図 3 明治13年(1880)卒業生

四 各人履歴典拠

同じ卒業生とはいえ、数冊の伝記を有する者から生没年すら不明の者まで様々である。ここでは『日本人名大事典』(一九七九)、『大日本博士録』(一九二二)、『明治過去帳』(一九七一)、『大正過去帳』(一九七三)などで見出せない人々(或はあっても簡略すぎる場合)について典拠(原典とは限らぬ)を示す。ただしこれらとて精粗様々である。

吉田(石田秀一『秋田の医史』一九八一)、浜野(『房総人名辞書』一九〇九、『日本国・国会全議員名鑑』一九八六)、石川(『新潟県大百科事典』蒲原宏分担、一九七七)、室賀(土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』一九七三)、須田(中外医事新報三四〇号一九九四、『信州人物誌』一九六九)、山崎泰輔(前掲・土屋一九七三)、三濬(三濬信三、中外医事新報一一七五号一九三二、小関恒雄、犯罪誌四八卷一号一九八二)、山崎玄脩(前掲・新潟県大百科事典)、松沢(松木明知『青森県の医史』一九八〇、長尾淳一氏私信)、三浦省軒(杉野大沢、日医事新報一七一九二〇号一九五七)、渡辺(土肥慶蔵『顎軒遊戲』一九二七、『武生市史』資料篇一九六六)、長谷川(長谷川五郎氏私信)、三浦浩一(『徳島県百科事典』福島義一分担一九八一、『徳島大学医学部史』一九八六)、小野(広島中国、明三四・五・二)、桜井(柳井貴三『桜井郁次郎先生伝』一九四一、『群馬県人名大事典』一九八二)、中村(前掲・松木一九八〇)、印東(『新宮市誌』一九三七)、大川(前掲・土屋一九七三)、大河内(『福岡県碑誌』一九二九、『尾張郷土文化医科学史攷拾遺』一九五五)。なお、大多和、菅野、浅川、柳下、赤鹿は詳細不明。

新藤(新実藤昭、日医事新報三二四六号一九八六)、鳥潟(高浦照明『大分の医療史』一九七八)、清野(『岡山大学医学部百年史』一九七二)、大森(宇留野勝弥『医傑大森先生の生涯』一九六一)、梅(太陽一卷七号一八九五、山賀勇、日医事新報一六四〇号一九五五)、河野(『福井県医学史』一九六八)、石黒(前掲・新潟県大百科事典)、野並(『高知県人

名事典』一九七二)、佐々木文蔚(『青森県人名大事典』一九六九、前掲・松木一九八〇)、熊谷省三(『岩国市医師会史』一九六八)、熊谷玄旦(『現代防長人物史』一九一七、前掲・岩国市医師会史)、半井(田中助一『防長医学史』一九五三)。田沢、魚住、高階、神内は詳細不明。

小林(『金沢大学第一内科』百年のあゆみ』寺畑喜朔分担一九八四)、伴野(前掲・土屋一九七三および私信、『金沢大学第一外科』百年の歩み』寺畑分担一九八五)、伊勢(『現代人名辞典』一九二二)、杉田(『日本現今人名辞典』一九〇一)、長尾(長尾美知『長尾精一伝』一九三二)、神田(『神戸市医師会沿革史』一九三七)、鈴木(『愛知県』田原町史』一九七八)、石川(『千葉大学医学部八十五年史』一九六四)、菅(前掲・岡山大学医学部百年史)、外山(『金沢大学医学部百年史』一九七二、前掲・寺畑一九八四)。沼浪は詳細不明。

なお、生没年月日は前掲「卒業生氏名録」一九二二年版、『日本医籍録』一九二五年版にも拠った。

文 献

- (一) 東京帝国大学五十年史 上册 三九一・四三二・四三三頁 東京帝国大学 一九三二年
- (二) 東京大学医学部百年史 一四七・二六二・三二五頁 東京大学出版会 一九六七年
- (三) 東京大学百年史 通史一(三三三・五三〇・六〇七・六一〇頁) 資料一(二〇四九・一〇五〇頁) 東京大学出版会 一九八四年
- (四) 小関恒雄、北村智明、Vanden, H. 外国人のみた明治十年頃の日本の医学校(上)―東京大学医学部の場合― 日本医事新報 三二八七号 五九〇六二頁 一九八七年
- (五) 鈴木要吾 明治十年前後の日本医学界(地) 東京医事新誌 二九七二号 四五〇六〇頁 一九三六年
- (六) 小関恒雄 榭俣の修学時代 榭俣先生顕彰記念誌 榭俣先生顕彰会 一九八七年

(新潟大学医学部)